

## 4 現代の大学生の人間関係 —「先生」「友だち」の存在が大学への着地を促す—

立教大学 学術調査員 谷田川 ルミ

### 大学の先生との交流は大学生生活を豊かにする重要なファクター

大学生にとって、大学内の人間関係は重要である。今回の調査では、大学の先生との交流と大学の友だちとの関係の現状について聞いている。

大学の先生との交流は、全体の51.4%が「ある」（「よくある」+「まあある」、以下同）と回答しており、大学生の半数超は先生との交流の機会を持っている（第2章 図2-3-1）。大学の先生との交流が「ある」学生は、「ない」学生よりも大学生生活に満足しているという結果となっており、その差は16.9ポイントにもなっている（図2-3-4）。「大学の先生」という存在は、授業をする人、成績をつける人、といった距離のある存在と思われがちであるが、現代の大学生たちにとって、先生との交流は大学生の大学生生活を豊かにする重要なファクターとなっているようである。

先生との交流の場としては、主に授業やゼミが中心となっており、授業以外の機会、例えば「オフィスパワー」などの利用はまだ少ない。授業以外の先生との交流の中では、ふだんの授業からでは学べないような、この先の人生の糧となることを学ぶ機会でもある。こうした交流の時間が準備されているということを、大学側や先生自身ももっと学生に周知することも必要であると思われる。

### 大学生の友人関係の実態

大学生の友だち関係をみてみると、「一人で行動していても気にならない」（83.4%）、「違

う意見を持った人とも仲良くできる」（80.2%）、「友だちを傷つけないように気を遣っている」（78.6%）といった項目に「そう」（「とてもそう」+「まあそう」）と回答する割合が多くみられている（図2-3-11）。大学生の友人関係は、異なる意見を持つ友人を承認し、相手が傷つくことは言わない。「グループの仲間同士と一緒にいたい」という意識も持っているが、単独行動することもいとわない。お互いに気を遣い合い、傷つけない程度の距離を取り合う「ハリネズミの関係」のようにみえる。彼らは、義務教育における「総合的な学習の時間」、大学におけるグループワーク中心の授業を経験している。また、就職活動においても「コミュニケーション能力」が重視され、常にそれを意識させられている世代でもある。こうした経験が、相手を不快にさせない、自分も不快にならない人間関係をつくっているものと考えられる。

### 友だちがいらないと思われたくない？

世間では、大学生特有の対人意識を示す言葉として、「便所飯」（一人で食事をしているのを見られたくない）などと言われているが、今回の調査では、「一人で食事をしているところを人に見られたくない」と回答した大学生は37.1%であった。前述した「一人で行動できる」学生が8割以上いることを考えると、世間で言われているほどには、現代の大学生たちの間に「便所飯」予備軍はいないということになる。しかし、大学生の間で流行っているネットスラングには「キョロ充」（大学内で常にキョロキョロと知り合いを探している人）というものもあ

り、揶揄の対象にもなっている。1人でのいるのは大丈夫でも、友だちがいなとは思われたくない、それが本音なのかもしれない。

データでは、大学内に「話をしたり一緒に遊んだりする友だち」が「いない」学生の割合は5.9%であるが、「悩み事を相談できる友だち」となると21.4%となっている(図2-3-7)。特に男子に多く、25.3%が学内に深い話のできる友だちが一人もいないと回答している(図2-3-8)。また、大学内に「悩み事を相談できる友だち」がいない学生のうち、男子で56.3%、女子で39.0%が大学外にも「いない」と回答しており、「ハリネズミ」的な友人関係は築けても、深い話ができる友人関係を築けない姿が浮かび上がってくる(図2-3-9)。

友だちの数が多ければいいというわけではないが、「友だちがいなと思われたくない」という見えない圧力と、どの程度の深さのつき合いをするのかといった狭間で、大学生たちは友人関係を模索しているように思える。

### 大学内に友だちがいることの意味

とはいえ、下図に示したように、大学内に「話をしたり一緒に遊んだりする友だち」が複数存在することは、大学生生活を満足なものにする要因となっている。大学生と話していると、「友だちに会いたかったから授業がなくても大学に来る」という声をよく耳にする。大学内での友人関係が盤石であるということは、大学に満足し、豊かな学生生活を送るといった点において、重要なことであると思われる。

大学という場においては、勉学も重要であるが、それ以前に大学という場に「着地」できているかどうか重要である。「着地」できていないと欠席率の上昇や学習への意欲の低下、ひいては中退予備軍になってしまうこともある。本調査の結果からみても、大学生にとって、大学内の人間関係は、大学への「着地」に大きく関わってくるものと考えられる。

### 大学内にコミュニケーションの「場」を作ることの必要性

大学にできることとしては、大学生同士が知り合える「場」、つながり合える「場」を提供することだろう。特に、入学前後や大学1年生の時の友人との出会いが4年間を通じた人間関係へと発展していることから、新入生を対象とした既存のプログラムに加えて、学生同士のワークを増やすことも効果的であると思われる。

また、3～4年にかけてはゼミでの出会いが多くなってくる。大学の友人はただの遊び仲間というだけではなく、ともに勉学をする仲間でもある。授業外の時間で友だちと一緒にゼミやグループワークの準備をしたりする「場」、例えば最近注目されている「ラーニング・コモンズ」のような場所を大学内の空きスペースを利用して設置することも効果的であると思われる。

今回のデータからは、「先生」「友だち」の存在が大学への着地を促す可能性が示唆された。大学や社会の側としては、こうした大学生の意識や生活の実態を正確に把握し、現状に即した学生支援を考える必要があるものと思われる。

図 話をしたり一緒に遊んだりする友だちの数(大学内) × 総合的な大学満足度

友だちの数	人数	満足度 (%)		
		満足	どちらでもない	不満
11人以上	(1,114)	78.8	13.6	7.5
7～10人	(924)	70.2	18.9	10.8
4～6人	(1,352)	66.1	21.9	12.1
2～3人	(999)	52.9	28.2	18.9
1人	(182)	39.6	35.2	25.3
いない	(278)	30.9	29.5	39.6

注) 総合的な大学満足度は、「大学生生活を総合的に判断して」との質問に対し、「とても満足している」+「まあ満足している」の回答を「満足」、「あまり満足していない」+「全く満足していない」の回答を「不満」としている。